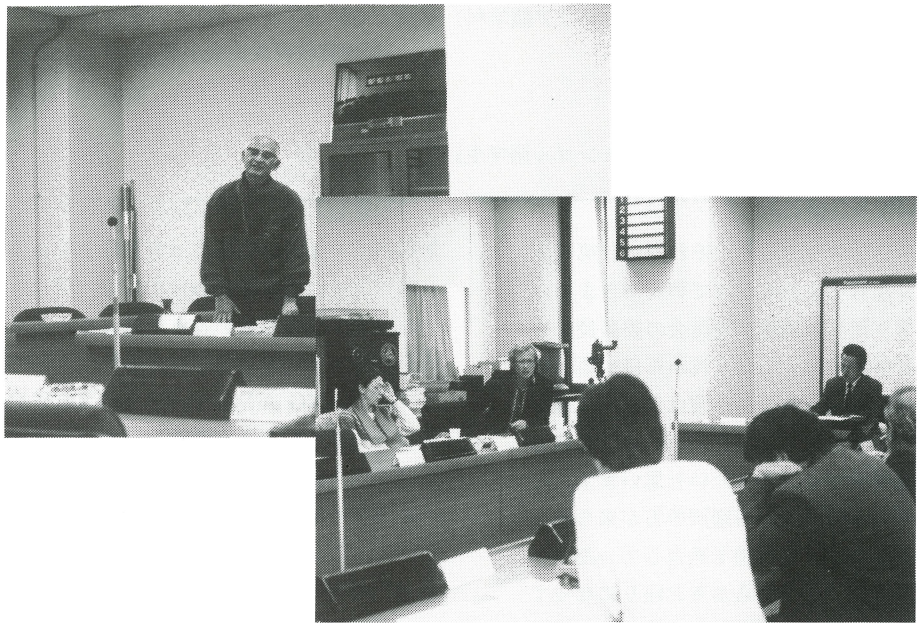
ISSN　0288－1594

AV JOURNAL

1990年7月　第18号



〈デシジョンルームにて〉

目　次

〝外大における外国語教育について〟
外国人教師による座談会(第6回)……2
〈ＬＬ便り　1〉視聴覚教材作成サポート・システム……13
〈ＬＬ便り　2〉視聴覚教育施設案内……14
1990年度ＬＬ授業時間割表……16

大阪外国語大学

"外大における外国語教育について"

外国人教師による座談会 第6回

(1990年2月2日)

出席者

マーラヴィア、ラクスミ・ダル	(ヒンディー語学科)	通訳	
ドブチンギン、オットゴンスレン	(モンゴル語学科)	斉藤隆文	(英語→日本語)
タリマ・アブセル・モネイム・	(アラビア語学科)	大津智彦	(日本語→英語)
イブラヒム	(ドイツ語学科)	視聴覚教育委員会委員長	
ヴァイラント、ヨアヒム	(イタリア語学科)	橋本勝	
サイコ、アントニエッタ		視聴覚教育委員会小委員	
		冨田健次	
モンゴル語通訳		郡史郎	
フフバートル	(モンゴル語学生)	近藤達夫	

橋　本：「定刻になりました。それでは、第6回AV座談会を始めさせていただきます。まず、司会は視聴覚委員会の委員長をしております橋本です。これから日本語の発言は英語に、英語の発言は日本語に通訳されますので、原則的には日本語ないし英語で発言して頂きたいと思います。それから、語学科から通訳の方が来られている場合はその言語で発言していただいて結構です。こちらからお座りになっている順番に簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。それでは、マーラヴィア先生からお願いします。」

(自己紹介略)

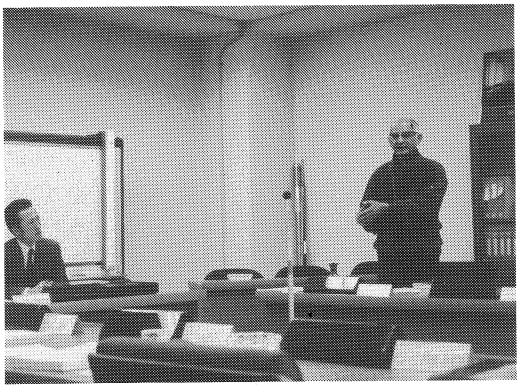
橋　本：「どうも有難うございました。以上で皆様の自己紹介を終わらせていただきます。それでは、今日の本題に移らせていただきます。今日のメインテーマは、本学インド・パキスタン語学科で25年間にわたりまして教鞭をとってこられたマーラヴィア先生に、『大阪外国語大学における外国語教育』と題して、お話を伺いまして、その後で、多国の先生方から、それに関連してご意見を伺っていこうと考えています。そして、2時30分に終了を予定しております。時間の進行をみましてさきほどちょっと申し上げました様に、4つの問題につきましても各先生方からご意見を伺い、そして、ディスカッションをしていこうと思います。マーラヴィア先生による英文のサマリー"TEACHING AT OSAKA GAIDAI"が皆様のお手元にありますが、ご発表の言語は日本語になっております。どうぞよろしくご清聴をお願いいたします。」

よろしくご静聴をお願いいたします。」

マーラヴィア：「私にとって英語も日本語も外国の言葉ですから、どちらも同じくらい下手ですけれど、言いたいことはだいたい英文で昨日書いたのですが、もちろん先生がおっしゃった通りきつい事なんです。だけど、どうしてきつい事を言うかというと、まあ、私の人生の一番貴重な時、この大阪外国語大学で過ごしました。インド人の考え方で言えば、25年間この学校にあげたのです、だから、この学校は外国の或大学ではなくて、自分のものだと思っています。自分の息子に怒ることがある。自分のものですからこの学校に怒ることも、いいと思います。まあ、笑い話になりますけれども5、6年前伊地智先生が定年なさる時に私、挨拶に伺ったのですが、伊地智先生が多分勘違いして、私に聞きました「先生はこれからどうなさいます

か」、多分、私がこの学校を辞めるとお思いになったのでしょう。そして、私が「いいえ、違いますよ、私はここに残ります。」と、ちょっと無礼な答をしたのです。その気持ちで私は今日自分の考え方を皆様の前で話したい気持ちです。私は、1966年に大阪外国語大学に来た時のことをよく覚えています。3年生と4年生のヒンディー語学科の学生が普通の言葉も会話もわからないのです。あの時からもう25年たちましたが、今のヒンディー語学科の学生達は上手になったと言えないんです。普通、日本人は外国語が下手であるとか、できないとか、苦手であるとかよく言われるのですが、私はそれが正しいとは思っていません。これは言い訳だと思うのです。こんなにたくさんの機械があって、学生達も頭が悪いんじゃありません。先生達が一生懸命教えているのです、ひとりの学生に3人、4人、5人、6人の先生が一生懸命教えているんです。4年間かけて、卒業する時は普通の会話ができるかできないかなんです。それはどうしてでしょうか、教師として私達一人一人がすごく恥ずべきことではないでしょうか。私の考え方で理由は外にあります。私の学科の例だけをあげますが、どんな学科でも同じことなんです。ヒンディー語学科の卒業者は卒業してから、どこに勤めるのでしょうか、ヒンディー語関係、インド関係のところは殆どありません。いつか計算してみたんですがこの25年間に25人もないです。はっきり言えば7人か8人しかなかったのです。まあ、外大卒業者はたとえば大和銀行で勤める、私達が卒業を学長さんから貰うのです。卒業したものです。なにを卒業したのですか、ヒンディー語学科。だけど、卒業してもヒンディー語ができるかできないか私達みんな知っています。だから、その卒業証書は何の卒業証書ですか。それを私達も知っています。きつい言い方ですが、どこか嘘じゃないですか。それに、大和銀行さんも知っています。大和銀行さんにヒンディー語は全然いらないのです。大和銀行さんにとっては大阪外国語大学とか関西外国語大学とか、どんな大学でも同じなのです。高校卒業者より大学卒業者、その大学はどの大学でも、どこの大学でもいいのです。一つの理由はこれじゃないのかと私は思うのです。これは私達にとっては仕方がないのです、社会を直すことは私達に今はできないのです。だけど、これも考えなくてはいけないと思います。二番目は、私は自信を持って言えないのですが、先生達の前で疑問のかたちで言いたいです。それは母国語の力です。私の考え方で、母国語だけで人間は外の物のイメージを頭の中に、心の中に置けるんです。簡単な例をあげますと、マハトマ・ガンジーはグジャラート州で生まれてグジャラート語が彼の言葉だったのです。だけど本当はグジャラート語は彼の言葉じゃなかったのです。グジャラート州の一部だけ小さなところオールバンダリジムナーガ、そこの地方の言葉が彼の母国語だったのです。インディラ・ガンジーと私は同じ町で生まれたのです。だけど、インデラ・ガンジーは、もし、同じ町に出て買物をしようとしたらできないんです。これは本当のことです、彼女の妹さん、庭師に何か教えていたのです、庭師が思っていたのは、この木を倒せ、切り倒せと思っていたのです。分からないのです、どうしてかと言うと、私の母国語はヒンディ語じゃないんです。私の母国語は、あの地方の言葉アバティーなのです。私は、全てをヒンディー語じゃなくて、英語じゃなくて、日本語じゃなくてあの地方の言葉で受けとるのです。つぎの言葉、フランス語でも英語でも2番目、3番目にくるのです。だけど、どんな言葉でもベースは私のアバディーしかないんです。私は、先生達に聞きたいんです、質問です。日本の場合は、地方の言葉はわかりますか？　この明治時代

から地方の言葉をわざとなくして東京の言葉を標準語にしてこのベースをなくしたんじゃないかなあと、私は、思うのです。どうしてかと言うと、地方の言葉は、口とか頭のものじゃないんです。大地から生まれた、大地につながってる、日光が入っているその言葉なんです。まあ、東京の人口の２％しか多分江戸っ子はいないじゃないですか、あとは全国から集まった人です。その東京の言葉、ＮＨＫの言葉を標準語にして、まあ、できるのはできますけれど、学生達の頭の中にそのベースがなくなっているんじゃないかと私は聞きたいのです。後は外じゃなくて、私達の責任です。この大学ではどんな学科でも大体同じ様な教育のやり方で行います。文法、翻訳、ネイティブ・スピーカーの発音。文法は、高校時代に教えるのならわかります。どうしてかと言うと、日本語は日本人の言葉です。みんな言葉を知っているのです。だから、その言葉の文法を教えるのはわかります。生徒達みんなわかります。だけど、ちょっと考えて欲しいのです。どちらが先にくるの、まあサンスクリット語で文法をシャックダームシャーセンと言うのです。言葉通り、Disciplining the words 言葉のしつけなんです。だから、１年の時に外大で、４月、５月、６月に外国語の文法を教えるのは、言葉はまだ知らないのです。だから、なんのしつけをするのですか。しつけするものがないのです。しつけされるものがないのです。だから、これは少し矛盾しているのではないでしょうか。私は、そう思っています。もちろんヒンディー語、どんな言葉でも、小さな短い文章は、自分の中に文法も全てもっているのです。だから、文法にそんなにたくさんの力をかけても、学生達がその言葉自体がいやになってしまうのでないかと思います。同じことです翻訳も、もし、ヒンディー語の言葉の性格を教えるために、日本語からヒンディー語、ヒ



ンディー語から日本語に訳してもらわなければならいと思えば、私の考え方ではヒンディー語学科の学生達になるべく日本語を遠く離して、ヒンディー語だけにした方がいいのではないでしょうか。日本語からヒンディー語、ヒンディー語から日本語、どちらにしてもそこに日本語があります。あるいは逆にして、私は、常にしています、小さな文法を書いて意味を教えて、文法を教えることは私にできませんし責任もありません。だから、黒板に短い小さな文章を書いて、意味も教えて、考えなさい、座禅をしなさい、私の考え方でこのようにすればどうかなあと思います。１年の終わり頃とか２年に文法や翻訳をやった方がもっといいんじゃないでしょうか。２番目は、ちょっと先生達に叱られるかもしれませんが、この学校で客員教授は、日本人の先生にできないことを何かやっているでしょうか、ひとつもやっていません。もし、日本人の先生達が、学科の言葉で教えたら全てができます。発音もできます、会話もできます。ちょっと飾りものみたいじゃないかなあと時々思います。その上に、私を含めて客員教授の多くはみんなあるところ、ある点で不満を持っています。25年前の話です、私が１回教授会に入ってお願いしたんです。みんな同じ先生です。同じ学生達を教えています。どうして外人の先生達を呼ばないんですか、まあ、日本語がわからない方もいらっしゃ

いますが、通訳して仲間にした方がいいんじゃないですかと、私は、お願いしたんです。25年経っていますけれども、今も前と同じみたいです。私は、インド生まれです。インドのどの大学でも客員教授というものはないんです。高校の時から、もちろんインド人の先生ですが、みんな英語の授業の時には必ず英語でやります。大学、大学院の授業もインド人の先生は、英語でやります。３番目は、発音の問題です。この25年間、私もなるべく正しい発音を教えてきたんですが、そんなにたくさんのお金や時間をかけても、かえってくるものはあまりないと思います。正しい発音を教えて、ヒンディー語学科の学生達が上手になった、会話ができたとは思えないのです。それと、正しい発音とはどれでしょうか、ヒンディー語でもラクノウの発音は、エルヒィの発音とは異なります。英語でも、イギリス、オーストラリア、アメリカ、全部英語の発音は、全部同じじゃないと思います。スペイン語も同じでしょう。だから、たくさんの時間を正しい発音だけにかけて、かえって学生達にコンプレックスを与えてしまうんじゃないですか。ずっと、くどく言っているんですけれど、普通の会話、普通の話をもっとした方がいいんじゃないでしょうか。これを見ると、一番かわいそうに見えるのは、日本人の先生達なんです。学科のある先生は、去年だったでしょうか、40冊もの卒業論文をチェックしなければいけないんです。自分の研究もあります、先生達は一生懸命それをやりたいのです。だから、こっちが４年間教えてもヒンディ語ができないとか、フランス語ができない、卒業して外に出てしまうこの学生達、こっちは自分の研究、まあ、この研究のことも、私は、日本に来て初めてわかったんです。まあ、自分が卒業したエラハバ大学と言うところでは、先生は、勉強しないのではないのですが、研究論文を１冊も出したことがないのです。殆どの先生方がそうなんです。もちろんみなさん方は名前を知らないでしょうが、サガナナチャ、有名な先生だったのです。多分、彼は、１冊しか本を書いていないと思います。そういう先生方がたくさんおられます。そのかわりに何をしていたのでしょうか。全ての研究、勉強したものは、すべて無理矢理自分の学生たちにあげるのです。無理矢理にですよ。その結果、今はちょっと減っているんですけど、私の時代は、中

央政府の国家公務員中80％はエラハバ大学出身でした。誰のおかげでしょうか。あの先生方の無理矢理です。まあ、最後に、この大阪外国語大学は、私は、普通の大学と思ってないのです。特に、この日本の社会において、この学校こそ、この社会の目、耳、鼻です。今はいいです。今はヒンディー語学科からでた者は、大和で勤めてもいい、ダイエーで勤めてもいいです。だけど、10年後、20年後、こんな事は、ないでしょう。その時代、その時のために、私達もよく考えて、自分を変えないといけないです。まあ、これは、本当に私個人の考え方なんです。もし、話しかたとか、言葉使いとか、きつければ許してください。どうもありがとうございました。」

橋　　本：「どうも有難うございました。日本における外国語教育といいますか、方法論に関する厳しい、また率直なご意見をうかがいまして、身の引き締まる思いでござ

います。従来の日本における外国語教育の行われ方に対する批判、率直なご意見をいろいろうかがったわけでありますけれども、このお話を、お聞きになりまして、また違うご意見もあろうかと思います。全くその通りだということも、あるかと思います。少しずつ、各先生方から一言でも何かご意見ありましたらおうかがいしたいのですが。

サイコ：「先生がおっしゃった通り、日本の企業、学生を雇う時、本当に、その専門の外国語を、出来るかどうかあまり関係ないみたいですけど、それは仕方がないでしょうね。こちらからそれを、変えることはできないでしょう。しかし、外国語が出来る価値は、仕事で使うかどうか、それに限らないでしょう。学生自身は、わかると思いますね。だから、ひとつの外国語というのは、ひとつの違う国の文化を、少しでも理解出来るのは、自分のための役に立つことになるのね。人間が大きくなるということになるから、それは忘れないでほしいですね。みんな就職のことばかり考えるのはちょっと問違いだと思います。外国語を、しゃべるだけでなく、読めることも、外国の文化を知っている事も、人間は豊かになるということですね。それを、私は、大事にしています。」

橋　本：「確かに、サイコ先生の言ってらっしゃる事は、よく分かったわけであります。しゃべるとか、そういうことばかりじゃなくて、やはりそのひとつの文化といいますか、そういうものを、身につける、あるいは、物を読む事によって、違う文化を学ぶ、そういう所にも、外国語教育の意味があると言われたと思うんですね。どうもありがとうございました。じゃあ、続いてご意見がありましたら、おうかがいします。どうでしょうか。」

オットゴンスレン：「ちょっと先生方にお聞きしたいことがあるんですが、ヒンディー語の音声論、文法と日本語のそれとでは違っていると思うんですが、日本の学生にヒンディー語を教えるには、文法とか発音ばかり教えないで、ほかに何か教える方法があると思われますか。」

マーラヴィア：「まあ、これは偶然でしょうけれど、語学的には全然関係ないんですけど、ヒンディー語と日本語は、文章がすごく似ています。と言いますのは、たとえば、ヒンディー語で書いたものを言葉通り直訳すれば90％は正しいんです。発音は違います。」

オットゴンスレン：「外大で勉強したその言語は、社会、特に企業では使われていないのは事実ですけれど、たとえば、モンゴル語学科を出た学生の場合は、もちろんモンゴル語で就職していないんですが、モンゴル関係の企業へ就職して、モンゴルからお客さんが来ても、モンゴル語が喋られなかったそうです。しかし、それを非常に恥かしく思って、また後からやり直そうとしている学生もいるんです。だから、それは、就職でできなくてもその言語を覚えて研究したことだけでも、それをまたふたたび利用しようとしているのはどうでしょう。」

橋　本：「いろいろな問題がマーラヴィア先生のお話の中にありますので、ある程度テーマを絞った方がいいのかもしれませんけれども、今の点についてでも結構ですし、また、その他、例えば、ダイアレイアレクトの問題も出ておりました、母語とダイアレクトの問題。それから、発音の問題、発音をあまり厳しくするのは、どれだけ意味があるのとか。つまり、発音のバラエティーが当然あるわけで、まあ、そういうものにあまり時間を費やすというのは、よくないんじゃないかとか、そんな意見もございました。いろんなたくさんな問題点がもりこまれていますので、皆さんが一番この点は、私は意見が違うとかありましたら、ほかの先生方から、また順にお伺いしたいと思います。タリマ先生、いかがですか」

タリマ：「外大の学生は、自分の責任以外の事ま

で、いろんな事を、しないといけないし、非常に忙しいので、専門に割く時間数が少ないように思われます。アラビア語では、22時間のうち18時間が専門ですが、4時間が一般ですか、それだったら、どうも、専門の語学を、勉強する時間が、非常に少ないように思われます。それから、3、4年生で、人文系の学部で、ある学科を専攻しているのに、母国語で授業が行われることは、エジプトではありません。ですから、日本語ではなくてその専攻で、授業をするのがよいのではないかと思われます。それから、3番目に、日本人のアラビア語の先生方は、非常に高度な知識をお持ちなわけですけど、非常にお忙しくて、エジプトでは、普通だったら、4年間に一回は、サバティカルがあるので、日本人の先生は、非常に忙しいです。」

橋　本：「時間数の問題。日本では、少なすぎる、半分ぐらいだというわけですね。授業時間が非常に少ないということです。それから言語ですね。常に授業は日本語で行われているということですね。本国語でやってないと。これも日本における教育の問題だと思うんですけども。私達としては、こういう問題も将来的には解決しなければならないといいますか、今すぐにといわなければならないかもしれません。どうも有難うございました。では、ヴァイラント先生。」

ヴァイラント：「アラビア語の先生は、外国語を教えるという点に重点を置かれていたようですけど、実際は、外国語をそれほど重視する必要はなくて、外国の文化というようなバックグラウンドを知る事の方が重要ではないかと思います。といいますのは、そういう事を勉強しておれば、卒業した後で、プラクティカルな事は、ほんの短期間で学習できるわけで、大学での教育というのは、その中身、文化的な背景というふうなものに、重点を置くべきだと思われます。」

橋　本：「ヴァイラント先生は、やはり、文化的な背景、外国の持っている文化、バックグラウンド、こういうものが重要ではないかというご意見です。これでひと通り各先生方からご意見を伺ったわけでございますけれど。マーラヴィア先生のお言葉が発端で、このようなご意見がでましたんですが、ここで、先生ご自身ですね、ご意見をお聞きになられまして何かございますでしょうか。」

マーラヴィア：「先生達（視聴覚小委員）はいかがですか」

橋　本：「それでは、日本人の先生からご意見を伺いましょうか」

近　藤：「我々3人ともだと思うんですが、みんなここの大阪外大出身ですね。大阪外大を卒業しまして、私は英語科出身です。恥ずかしいことですけれど、英語の話している外国へ行ったことがありません。どこも行ったことがありません。しかし、今の英語で話されたのは、聞いて全部理解できます。話す方はちょっと下手ですけれども、無理すれば少しぐらいできます。文法の問題ですけれども、やはり、文法というしっかりした枠組みがなければ、単に、外人の先生とお話する直接の機会だけだったら無理だったと思います。ここに先生が書いておられるように、全部話したとしても2日間じゃないかと書いておられますけれども、文法というのも、日本のように外国の先生が少ないところでは、やはり、それがあるから外国へ行っても、話せるとかいったことがあるんじゃないかと思います。それが一つと、それから、私達にとって先生方がなかったら、それぞれのデパートメントは存在しないと思います。先生は、インドそのものですし、それぞれの先生方は、代表ですからその代表の先生を通じてその外国の世界と直接触れられるわけで、失礼ですけれど、先生をお見かけして、いつも、ガンジーのような先生だと思っていました。決して飾りものじゃなくて、

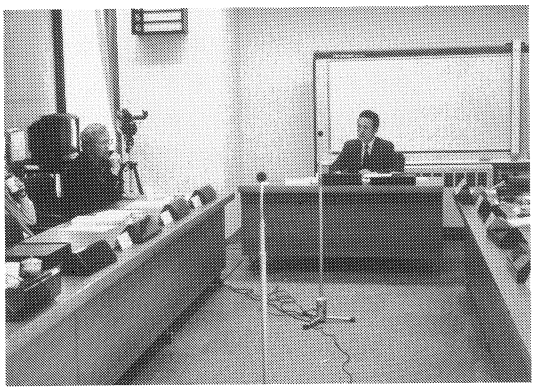
一番尊重しているのではないかと思います。私自身も、英語科で一番勉強したのは日本人の先生からではありません。今でも一番記憶に残っているのはやはり、外人の先生の考え方、いろいろ私達と違う所とかですね、それからまた特に、日本のように昔からコンベンショナルなものにとらわれない自由な考え方とか、そんな事が、すごく影響してそれしか覚えてないぐらいでして、決して先生方を飾り物とは、思っていないですけどね。」

橋　　本：「はい、どうも有難うございました。マーラヴィア先生、ご意見が、ひとつ日本人の先生からでました。他の先生もご意見があると思いますけれども、今日は、外国人の先生中心の座談会でもございますので、出来るだけ外国人の先生からご意見をお出し頂きたいと思うのですが、マーラヴィア先生いかがでしょう、このようなご意見がでたんですけど、さらに付け加えておっしゃりたいことがございましたら。

マーラヴィア：「先生、別にないんですけど、時間もあまりないんで、その他のテーマもありますから、さっきも、私は申しましたんですけど、地方の言葉といって、本当に私は、自分で分からないんですけど、標準語と地方の言葉は、どっちが人間にとって大切か、みなさんは専門家の方ですから、どう思っているでしょうか、私は、出来たらそれを聞きたいですけれど。」

橋　　本：「それでは、ダイアレクトの問題が先生のお話の中に出てまいりました。母語とダイアレクト、それから方言の位置といいましょうか、外国語教育に方言というものの生かし方と言いますか、何か方言に関して、ご意見があろうかと思いますけれども、外国人の先生からちょっとその点についておうかがいしてみたいと思います。方言の意味と言いましょうか、どういうポジションか。先生は、さっきおっしゃったように、インディラ・ガンジーと同じ郷里であって、同じ言葉をしゃべられていたわけですね。ヒンディー語じゃなくて。その辺をかなり強調されたと思うんですが、いかがでしょう、ダイアレクトと外国語教育というわけですが。」

サ イ コ：「難しいですね、それは。イタリアでは、地方によって、全然違う方言を、話しますからね。それは、ずっと問題でしたね。そして、例えば、上流階級の子供達は、当然イタリア語をできるし、下の階級の子供達は、正しいイタリア語は、あまりできなかったから、学校で方言をしゃべるのは、禁止になりましたね。それは、その影響で、またテレビとマスメディアの影響で、段々ある程度みんなイタリア語、まあ、イタリア語というのは、ちょっと難しい問題ですけど、一応みんなイタリア語を話すようになりましたけど、また、今度逆にまた、問題になるんです



ね。だから、みんな段々と方言を忘れてしまうでしょう。同時に、その地方の文化が、なくなってくるから、また逆の問題になってますから、これは、難しいですね。どこまで、方言を宅ったらいいのか、どこまで、ストップしないといけないのか、それは、決めるのは、話が長くなりますね。」

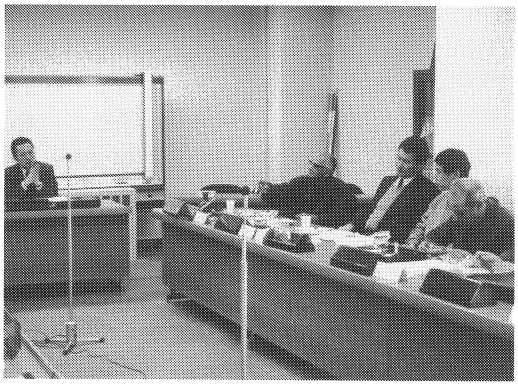
橋　　本：「方言の問題は、非常に難しいですけども、是非、これについてご意見という先生がございましたら、どうぞ。」

タ リ マ：「アラビアでは、22の国家で、それぞれの国家がいくつかの方言を持っていますので、外国人にとっては、非常に難しい

です。それで、外国人にとって、必要なのは、エジプトのカイロで話されている言葉と、それから少数の方言、それを学ぶ必要があります。」

橋　　本：「はい、どうも有難うございました。これは、非常におもしろい問題なので、是非、他の方からのご意見をほしいんですが。」

マーラヴィア：「先生、途中なんですけど、具体的に言えば、例えば、この先生は、標準語で考えてるか、地方の言葉で考えてるか、橋本先生は、標準語で考えてるか、地方の言葉、まあ、鹿児島弁とか、沖縄弁とか、まあ、どこでも新潟弁とか、地方の言葉で考えてるか、標準語で考えてるか、問題は、これなんです。どうして、私が、この話をしたかというと、日本では、地方の言葉は殆どない、なくなってますから、問題は、ここじゃないのかなと思うんです。まあ、あまり時間を取りたくないのです。インド人は、外国人に比べたら、ちょっと上手じゃないかなと思うんです。それは、どうしてかというと、沢山の言葉があります。祭りに集まった人は、こっちは自分の言葉でしゃべってるの、あっちは自分の地方の言葉でしゃべってるの。両方通じてるんですよ。だけど、しゃべるのは、自分の言葉でしゃべるの。その言葉は、標準語じゃなくて、地方の言葉なんです。問題は、これじゃないかなって思うんです。」



橋　　本：「なるほどね。今、マーラヴィア先生が、付言されましたようにですね、ダイアレクトでものを考えてるのかですね、あるいは、標準語で考えてるのか、これは、我々内省反省してみて、どうなのかなってちょっと迷うんですけど、純粋に言えば、確かに、ダイアレクトですね。日本の場合は、ここで先生もサマリーでのべられてますように、多様ではなく単一的ですね。ローカルダイアレクトが、壊れてしまったと、そういうふうにおっしゃってるわけですが、確かにそういう現象は、日本ばかりでなくて、世界的な現象ではないかなと思うんですね。ローカルダイアレクトが段々消えていくという現象は大なり小なりどこの国でもあると思うんです。ただ、日本の場合には、原則的に、ユニフォームで単一民族国家ですね、アイヌ民族とか、他の朝鮮の方とか、いろいろ住んでいらっしゃるんですけれども、まあ、単一民族国家と言えるわけです。ですから、多民族国家であるインドとあるいは、ソビエト、中国、その他の国々と比べて、ちょっと直接には比較できないかも知れませんが、今の方言とその標準語との対立とか、各国においてローカルダイアレクトが消えていって、中央集権化して、標準語へに集中してきつつあるということは、世界的な現象と言えるんであろうと思うんですけども、マーラヴィア先生が、再度尋ねられているのは、自分の土着の方言で考えているのか、作られた標準語で考えているかと言うことに非常に関心を持っておられるわけです。そこで、これについて何かご意見がありましたら、お伺いしたいと思います。オットゴンスレン先生いかがですか。」

オットゴンスレン：「先生方と同じ意見ですけれど、たとえば、モンゴルを勉強している学生にとっては、もちろん、モンゴル語の標準語を勉強した方がいいですけれど、特にモンゴル語の方言を勉強したければ、地方に行って研究した方がいいと思います。しかし、モンゴル語の場合だと、標準語に

しても地方の言葉にしても、そう違わないので、それはあまり問題にならないと思います」。

橋　本：「時間がかなり少なくなってまいりまして、マーラヴィア先生のお話の中で是非議論したいことも、まだまだたくさんありそうです。さて今日、議論されるべきポイントを4つ位そこにあげました。①どのように教えていますか、②授業の目的は何か、③どのように日本人の同僚の方と協力されていますか、④語学科のカリキュラムとの関連はどうか、このような質問項目が皆様のお手元にございますが、これについて全部を論じあう時間はなさそうでございますので、多少省いていこうかと思います。それでは、第1

番目の質問なんですが、1．What is your teaching method at Gaidai？どこでも言われるような質問なんでございますけれども、ティーチングメソッドについてのご意見を簡単に各先生方からひと言ふた言お願いしたいと思います。それでは、ヴァイラント先生いかがですか」

ヴァイラント：「先ほど、文化背景ということを申しましたけれども、もちろん、話すということも興味を持っていまして、まず、テキストとそれについての問題と答を作って、そこで、学生達にまずはそれをやらせるわけですけれども、次に、それにしばられない形で、そのテキストを利用して自分達の意見を言うと、そうすると、学生達は自分の知らないことについては、もちろん、興味もわきませんけれども、自分の知っていること、つまり、自分で話を作っていき、それについて自由に語ると、そういうことをすると、学生達は、非常に興味を持って、自由に会話の勉強をしてくれ、たいへんこれが役に立っていると思います。」

橋　本：「どうも有難うございました。それでは、サイコ先生いかがですか」

サイコ：「私も同時にイタリアの文化のことを教えたいと思いますし、出来る限りイタリア語を話せるようになって欲しいですが、どうすればそういう結果がでるでしょうか。まず、私は、1年生の授業の時からイタリア語しか使いません。少しイタリア語ができるようになって、そこでヴァイラント先生と少し違うんですが、3年生も4年生もイタリアと日本の社会問題と政治問題について興味をもってないとは言えないし、少しずつそういう問題について議論できるようになっています。それは、小さなグループに分けて、まあ、無理やり最初からそういう風にさせることは無理ですけれども、少しずつそうできるようになっています。小さなグループに分けて、イタリア語を使って、まあまあいい結果がでてきます。多分、日本語を使ったら自分の意見が言えないと思いますが、イタリア語を使ったら、なんとなくいろんなことがでてきます。やっぱり、それは時間がかかりますし、非常に我慢しなくてはいけないし、ボンボンでてくるといけないし、いつも手伝ってあげないといけないし、少し議論ができるようになっているから、同時にイタリア語を使っていろんなことについて話したらいいと思います。」

橋　本：「どうも有難うございました。今、サイコ先生は、イタリア語で全部行っていると、おっしゃったわけですね。そうでないやり方もあろうかと思うんですけれども、つまり、ほかの言語を説明にあてているところもあろうかと思うのですが、

それについて、タリマ先生いかがでしょか。」

タリマ：「1、2年では、文法を中心にやり、3、4年ではアラビアの文化、歴史、哲学などを中心にやっています。マスター・コースでは、文章の書き方なども教えます。私がやっているのは、1回文章を読ませて、それを自分の考えで要約させるということなどです。アラビア語は非常に長い歴史と背景をもっていますので、高学年に従ってそれを学ばせるようにしています。」

橋　本：「どうも有難うございました。それでは、オットゴンスレン先生いかがですか。」

オットゴンスレン：「私の場合はちょっと違いますけれど、モンゴル語学科の先生方は、モンゴルで仕事をなさったこともありますし、モンゴルにいらっしゃったことがありますので、専門の方でも、モンゴル語学にしても文学にしてもよくわかっていらっしゃいますので私の仕事としましては、やはり、生きたモンゴル語で、どういう風にして生きたモンゴル語を学生達に教えるかいうことが中心になってきます。そして、私は、会話を通じて三つの目標をめざしています。一つは、モンゴル語の発音から生きた話し方を教えることです。二つめは、大学院でですが、モンゴル語の詩とか歌などからリズムを教えています。そして、三つめは、会話とか詩、歌を通じてモンゴルの文化、歴史、風俗習慣やその他、学生達の興味を引くことを教えています。」

橋　本：「どうも有難うございました。それでは、マーラヴィア先生、これについてなにかご意見あるでしょうか。」

マーラヴィア：私もサイコ先生と同じで、1年生から4年生まで最初の日からヒンディ語しか使いません。1年生では私の責任は、発音とＬＬと少しだけの会話です。2年生になりますと、やさしいヒンディー語の教科書を使って、あとは作文なんです。作文もチェックするだけではなくて、殆ど、私が、間違ったところをマークして返します。次の時、授業じゃなくてゼミナールのようになってしまうんです。ひとりひとりを横に座らせて、80%位は学生達が自分でそれを直すことができます。だから、それは監督をするようなかたちで、それはよく役に立っていると思います。3年生になりますと、もう少し難しい教科書、たとえば、短編とか小説で、詩はあまり学生達は興味も持っていません。それを教えて、また、それの作文を書いてもらうかたちになっているんです。4年生は、やろうとしてるんですけど、まあ、3～4年前からだれも近づかないんです。みんな逃げてしまうんです。」

橋　本：「どうも有難うございました。第1番目の質問は、このように皆様にご意見を伺いました。あと3問ほど残っているんですけれども、時間の都合もございますので、第3番目の How do you cooperate with your Japanese colleagues ? この質問について、ご意見を伺ってみたいと思います」

マーラヴィア：「それは問題になっていないと思うんですが。」

橋　本：「新しい先生もいらっしゃるので、ちょっと、そのへんご意見がございましたら。」

ヴァイラント：「問題は全然ありません。」

橋　本：「ほかの先生方はいかがですか。」

タリマ：「私の学科では、日本人の先生方と1週間に1回、会合をもって、そこで協議をしています。」

オットゴンスレン：「モンゴル語学科の場合は、たとえば、先生方からいろいろモンゴルについての質問がある場合は、お答えたりしています。先生方と共同研究をしたいと思っています。」

橋　本：「どうも有難うございました。それで、先ほど、サイコ先生、マーラヴィア先生から、それぞれ授業で、ヒンディー語しか使わない、イタリア語しか使わないということですが、それに関連しまして、モンゴル語学科では、１年生は、ネイティブの先生と日本人の先生と共同の授業が一つあるんですね、オットゴンスレン先生は、そのことについてご存じだと思いますので、ちょっと、お伺いしてみたいのですが。」

オットゴンスレン：「１年生では、直接モンゴル語で授業をするというのは難しいので、モンゴル語学科では、日本人の先生と共同で授業をやっています。それは、モンゴル人教師が、モンゴル語で簡単な会話から話し、用語について説明し、それを日本の先生が学生達に日本語で説明し、徐々に単語を教え、簡単な会話を教えます。」

橋　本：「どうも有難うございました。本日は、４つの議論すべきポイントをあげておいたのですが、２問だけ議論したところで、所定の時間になってまいりました。まだまだ、論じなければいけないことも残されているんでありますけれども、ここで、最後に全部を通して、外大の外国語教育に関して、是非、これだけは注文しておきたい、あるいは、ＬＬのＡＶ委員会、施設とかサービス等のご要望がありましたら、なんでも結構ですから、外国人の先生方からご意見等をお伺いしたいと思います。」

マーラヴィア：「一つだけＬＬについてあります。ＬＬをなくした方がいいんじゃないかと思います。どうしてかと言いますと、本当に役に立たないと思うんです。チェックするのが一人しかできないんです。今、私は、１年生を18人と20人の二つに分けています。38人一緒に90分間で無理ですよ、一人二人に３分与えても、同じときに、他の学生達は、どんな練習をしているか、どんな間違った発音を覚えているかわからないんです。昔、私は、今も私の耳は地獄耳ですから、もう、みんな前に座らせて、30人いても一人や二人間違った発音をすれば、すぐにわかります。言いたいのは、ＬＬを今の形で使わないで、学生達みんなにテープを渡して、自由に練習させて、その時間を会話とか他の時間に使った方がもっといいんじゃないかと思います。」

橋　本：「どうも有難うございました。マーラヴィア先生から、最後にＬＬに対する非常に手厳しいご批判で、ＬＬ自体の存在が問題になるかとも思うんですけれども、確かにそういう面もありまして、機械偏重ということじゃなくて、やはり、外国語教育の本質はどこにあるかということを問われたんだと思います。私ども、本当に心しなければいけないことでありまして、今後の外国語教育についてもですね、ハードウエアばかりじゃなくてソフトウエアと言いますか、外国語教育の本質とは何かと言うことを肝に銘じながら、この外大の語学教育を推進してゆきたいと思いますので、是非、客員の先生方も、その点に関しまして、宜しくご協力ご支援をお願いしたいと思います。本日は、６年ぶりの大変な雪が降りまして、足場も悪いところお忙しいなか御出席頂き最後まで貴重なご発言、ご意見を伺いまして、先生方に委員会を代表しまして、厚くお礼を申しあげます。それから、本日の会議の内容は、後日「ＡＶジャーナル」に掲載したいと考えています。その際には、先生方にお届け致したいと思います。本日は長い間、本当に有難うございました。」

〈ＬＬ便り１〉 視聴覚教材作成サポート・システム

高度情報化時代に入り、情報の高度化は、今やあらゆる分野に拡がっており、とりわけ視聴覚教育においても、多種多様のメディアが入ってきています。特に、映像機器の発達、映像資料の充実により、それらの授業への利用が非常に多く行われています。

視聴覚資料係においても、それらのニューメディアに対応し、より効果的な視聴覚教育ができるように、多種の教材作成のサポートを行っています。

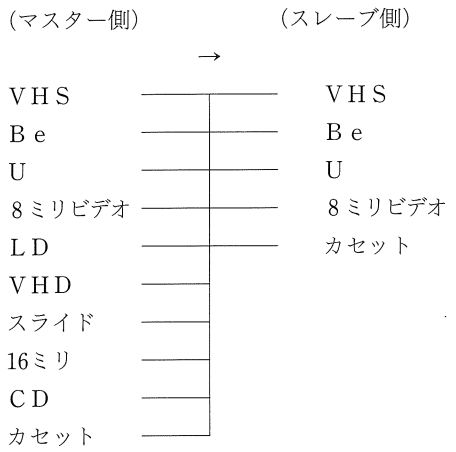
今回は、それらの視聴覚教材作成のサポート・システムを紹介します。

① クラス用カセット・テープのコピー

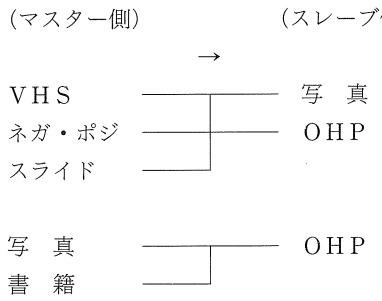
② ＡＶ資料のマルチ・コピー

形態の異なるＡＶ資料をマルチにコピーすることができます。(図①参照)

図① マルチ・コピーシステム系統図



図② 静止画コピー・システム系統図



③ 静止画(ＯＨＰ、写真等)へのコピー

ＶＨＳ、ネガ、ポジ等の画像及び書籍をＯＨＰ、写真にコピーすることができます。(図②参照)

④ 映像(ビデオ)信号の変換(Pal, Secam→NTSC)

世界各国により、映像の信号は異なりますが(表①参照)、Pal、Secam方式の映像信号をＮＴＳＣ方式の映像信号に変換することができます。

但し、マスター・テープが３倍速で録画されている場合、映像信号が不安定な場合には変換できません。

表① 各国の映像信号

ＮＴＳＣ方式	日本、アメリカ、大韓民国、ミャンマー、フィリピン、カナダ、メキシコ
ＰＡＬ方式	インド、インドネシア、中国、イギリス、イタリア、オーストラリア、オランダ、スペイン、デンマーク、西ドイツ、ポルトガル、ブラジル、トルコ、パキスタン
ＳＥＣＡＭ方式	ソビエト、東ドイツ、フランス、ポーランド、ルーマニア、イラン、イラク、ベトナム

⑤ 視聴覚機器の貸出

教材作成用、授業用の視聴覚機器の貸出サービスを行っています。(表②参照)

表② 貸出機器一覧

教材作成用機器	ＶＨＳビデオカメラ、Ｂｅビデオカメラ、８ミリビデオカメラ、カメラ用三脚
授業用機器	ＶＨＳテレビデオ（14インチ） ８ミリテレビデオ（６インチ）

〈ＬＬ便り２〉 視聴覚教育施設案内

視聴覚教育施設は、次の４つの施設からなります。

１．教育施設……授業に使用する諸施設

２．教材作成研究施設……各外国語教材の独自開発と製作と基礎的研究のための諸施設

３．共同利用施設……教職員、学生の共同利用を供するための施設

４．管理施設……事務及び視聴覚資料の整理、保存のための施設

それぞれの施設の概要は以下の通りです。

１．教育施設

①　ＬＬ教室

４つの教室があり(表①参照)、全ての教室でフルラボ、ビデオ、カセット教材での授業、衛星放送の視聴が可能です。

②　ビデオ教室

２つのビデオ教室があります。(表②参照)

これらの教室では、録音、録画し練習するブースはありませんがＰＡＬ、ＳＥＣＡＭ等の海外映像信号のビデオ教材を視聴することができます。

③　ＡＶホール

このホールは、ＡＶ資料、機器を使った多人数(176席)の授業、学会を行うことができます。

ビデオ、スライドは赤外線リモコンで操作でき、ビデオの映像は150インチの大型スクリーンで視ることができます。

④　ディシジョン・ルーム、同時通訳室

同時通訳を伴った会議ができます。会議者用ユニットは18席、通訳者ブースは５つあります。

２．教材作成・研究施設

①　録音室

ネイティブ・スピーカー等の音声をカセット、オープンテープに録音することができます。

②　スタジオ

ビデオ教材（Ｕマチック）の制作・編集ができます。

３管式ＭＦサチコンカメラ３台、特殊効果装置、ユニバーサルクロマキーヤーを使い、多種の画面合成処理ができます。また、編集時には、パソコン、ＣＧテロッパーを使いスーパー・イン・ポーズ、タイトル作成ができます。

③　音声実験室、無響室

サウンドスペクトログラフ、ビジピッチ、オシロスコープ等の音声分析装置を使い、言語の性質を解明するため、まざりもののない音声を収録、分析することができます。

３．共同利用施設

①　テープ・ライブラリー（４階）

各国語のビデオ教材、カセット教材の貸出、衛星放送の視聴サービスを行っています。映像資料は約1500点、音声資料は3600点を所蔵しています。

カセット自習用ブースは16、衛星放送視聴ブースは４、ＶＨＳ専用視聴ブースは４席あります。

②　個室ビデオ自習室（３階）

個別ビデオ教材、ヘッドホーンを貸出手続き後、この部屋で視聴します。全ての操作がリモコンででき、２人用ブースが12、３人用ブースが６席あります。

③　自習室（５階）

グループ（10人まで）でビデオ教材を視聴することができます。個別には、カセット教材、ＦＭ放送を聞くことができるブースが12席あります。

〈テープ・ライブラリー開館時間〉
（大学休暇日以外）

月・水・金	９：30～19：45
火・木	９：30～16：45
土	休　館

表①　ＬＬ教室仕様

室名	ブース数	備え付け機器
4－Ⅰ	45ブース	ＬＬマスターコンソール、カセットコーダー、オープンテープコーダー、ビデオコーダー(ＶＨＳ、Ｕ)、ＢＳチューナー、教材提示装置、ブースモニターテレビ、暗幕
4－Ⅱ	32ブース	ＬＬマスターコンソール、カセットコーダー、オープンテープコーダー、ビデオコーダー(ＶＨＳ、Ｕ)、ＢＳチューナー、教材提示装置、ブースモニターテレビ
5－Ⅰ	44ブース	ＬＬマスターコンソール、カセットコーダー、オープンテープコーダー、ビデオコーダー(ＶＨＳ、Ｕ)、ＢＳチューナー、教材提示装置、ブースモニターテレビ
5－Ⅱ	32ブース	ＬＬマスターコンソール、カセットコーダー、ビデオコーダー(ＶＨＳ、Ｂｅ、Ｕ)、ビデオプロジェクター（72インチ)、ＢＳチューナー、教材提示装置、ブース録画用ビデオコーダー(ＶＨＳ、Ｂｅ)、ブースモニターテレビ、リモコンテーブル、暗幕、スクリーン

表②　ビデオ教室仕様

室　名	席数	備え付け機器
３Ｆビデオルーム	36	ＶＨＳ、Ｂｅ、Ｕ、レーザーディスク、 ＶＨＳ（ＰＡＬ・ＳＥＣＡＭ） Ｂｅ（ＰＡＬ・ＳＥＣＡＭ） Ｕ（ＰＡＬ・ＳＥＣＡＭ） カセットコーダー モニターテレビ（37インチ） スクリーン
Ｄ棟ビデオルーム	90	ＶＨＳ、Ｂｅ、Ｕ、レーザーディスク、カセットコーダー、モニターテレビ(27インチ)４台

〈スタジオでのビデオ教材制作説明〉

1990年度 ＬＬ授業時間割表

	教室	I	II	III	IV	V	1	2
		9:10〜10:40	10:50〜12:20	13:10〜14:40	14:50〜16:20	16:30〜18:00	13:10〜19:40	19:50〜21:20
月 MON	4-I	C1A 中山	F2 田村	E1A スターク	E2B スターク	D1 山元	F 小沢	C 上神
	4-II		Ph2 ロランド	C2B 宿	R1B 生田	R1A 生田	R1 生田	
	5-I		F1 大木	F2 田村	E 高橋	F1 小沢		
	5-II		B2 ミヤティン	Ph2 ネリサ	Ph1 ネリサ	Ph1 吉村	E 柳田	
	V.R.	IP3・4 松村	K1 金	Ph3 ロサリオ	C 宿	It 中江		
	V.R.(D)	R2Bb プロトニコヴァ	R2Ab プロトニコヴァ	In1 松野				
	A.V. デシジョンルーム		E ネルソン					
火 TUE	4-I			E1 スターク	E1 スターク	It2 郡		
	4-II	U1 タバッスム	H1B スジャータ	M2 荒井	K 奥田	P1 ラジャブザーデ		
	5-I	B1 南田	B2 南田	E1A 舟阪	E1B 舟阪	F3 ボーロ		
	5-II		PH1B ロサリオ	F4 ボーロ	F3 ボーロ	C2 福家		
	V.R.	C3・4 杉村	K1・2 金	It3・4 郡	It1・2 郡	DM3・4 パルダンミュラー		
	V.R.(D)		Ph2 エミー	E 井上	教育心理 芋阪・落合			
	A.V. デシジョンルーム			K 金				
水 WED	4-I	P2 ラジャブサーデ	E 赤石		E 赤石	D3・4 高田(殊)	D2 乙政	D1 野村
	4-II		V1 富田	SDI ビヒマン	C2B 上神	DM2 パルダンミュラー		
	5-I		Ph4 ロサリオ	Ph3・4 吉村				
	5-II	F1B ボーロ	F3B ボーロ	C3・4 上神 12:20〜	S1 アルバレス	It3・4 郡	It3・4 郡	F 森・上野
	V.R.		S1 伊藤		B3・4 鈴木	E4 杉田	S1 伊藤	C2 深尾
	V.R.(D)	Ph1B エミー	Ph1A エミー	E 赤石				
	A.V. デシジョンルーム				S1 伊藤	保 小松		
木 TEU	4-I		V2 富田			It1 ローディ		
	4-II		H1A スジャータ		In2 アイプ	In1 アイプ		
	5-I	E1C 舟阪	Ph3・4 津田		DM1 パルダンミュラー			
	5-II		B3・4 ミヤティン	ＳＦ研究会	DM3・4 福居			
	V.R.		C2A 杉村					
	V.R.(D)	R2Ba プロトニコヴァ	R2Aa プロトニコヴァ					
	A.V. デシジョンルーム	地誌1 神前	人文地理A 神前					
金 FRI	4-I	C1B 中山	PB1 河野	C3・4 上神	E 森岡	C1C 原	E ドランス	E ドランス
	4-II	Ph2 ロサリオ	C2A 上神		D2B 杉谷	D2A 杉谷	E 田路	
	5-I	Ph1 津田	E3 船山＊		SD2 ビヒマン	PB2 東		F 大木
	5-II	F1A ボーロ	F2B ナカムラ	F2A ナカムラ	Ph1 ロサリオ			
	V.R.	E ショーロバーツ	K2 金	K3 金	K 金			
	V.R.(D)	R3A プロトニコヴァ	R3B プロトニコヴァ	Ph3・4 ロランド(前期) 横山(後期)	Ph3・4 ロランド(前期) 横山(後期)			
	A.V. デシジョンルーム		E ショーロバーツ		IP 松村	地球環境論 神前		
			E3 船山＊					

＊印 前半５－Ｉ、後半デシジョンルーム

編集後記

◇ Audio Visual Journal第18号をお届けします。今号は、〝外大における外国語教育について〟をメイン・テーマにした第６回の外国人教師による座談会の特集号です。本学で25年間にわたり教鞭をとってこられましたインド・パキスタン語学科のマーラヴィア先生のお話を軸にディスカッションがなされました。

ＡＶ Journal —第18号—

1990年８月31日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教室委員会
附属図書館視聴覚資料係

発行 大阪外国語大学

印刷 ㈱ムラタ印刷